

す。

細川史料をつくる過程の一つのエピソードでございますが、共産党の弾圧がありまして世に三・一五事件、四・一六事件がございます。逮捕で残された家族の方々は生活に大変困窮する、それでなくてもあの時代に共産党事件で捕えられたということですから大変な事です。この細川資料は特に裁判記録を複写、カーボン紙で書きまして、三部とるわけですがこれを布施達治の法律事務所で、弁護士ですから色々借り出してきてこれを筆稿する。この写す仕事は三・一五、四・一六の家族の方々のアルバイトになるわけでございます。実はそのお金はどこから出て来たかという、三組つくりまして、一組を大原社会問題研究所で買上げる。そのお金がそういう費用に回るといった形でやられたわけでございまして、松川事件の岡林弁護士なんかも当時は駆け出しの法律家でありまして、彼も筆稿をやってかなり生活費が助かったなんて話がありますが、そういう風な中で出来上がったものでございます。従いましてこの細川史料の中には、権力側の色々な動きの問題についても史料はかなり含まれておりますし、今ではとても集められない様な米騒動当時に内務省が県知事宛に出した暗号電報なんてのもちゃんとありますし、今から思いますと大変に集中した立派な史料蒐集であります。後世の我々から見ましても史料蒐集の在り方という点だけに限りましても大変学ばべきところが多いのでございまして、ですから米騒動研究に関わる人々

が細川史料といえばあれだと、こういう事になるわけでございます。現在大原社研に全部ありまして貸し出しはしておりますが、一般公開はされております。その他これ又余談でございますが、この史料蒐集を研究所としてやるに当って、蒐集についての細川先生の日誌のことがございまして、この日誌をみますと、何時、何という研究員の方が富山の郡役所史料を買いに出かけたとか、或は何時三・一五の家族の方々に幾ら費用をお払いしたとかいったようなことまである記録が残っている。細川史料はこの私自身も大変お世話になった方でして、そんな様なわけで、現在米騒動研究に関する根本資料といつて良いかと思っております。

もう一つ細川先生のことを言えば、大原社会問題研究所雑誌に大正七年米騒動史料富山県の部と和歌山県の部を発表されております。これは大変に面白い文章でございまして、しかも文章のはしほしに一貫して米騒動に参加した大衆に対する共鳴といえますか買かれた大変温かい文章でございまして、残念ながら細川先生は米騒動に関する直接の研究としましては、この二つをもつて発表が止まっております。これは止めるをえなかつたあの時代の弾圧体制というのが災いした結果だと思っております。

四、吉河光貞による権力側の研究

次に、片山潜、細川先生の研究がございまして、一方で、被支配階級だけではなかつて、支配階級の方もこの米騒動から大変なことを学んでお

ります。それを集約したのが吉河光貞という当時名古屋の地検の検事正でございますが「所謂米騒動の研究」を書き、これは十数年前迄は直接本物を目にみるものがほとんど出来なかつたんですが、その後農民運動史研究会が複製をいたしまして全国に出しております。もう絶版になつちやつたんですが、これはそういう立場に立つた、つまり権力の側が国家権力を使って米騒動の史料を蒐集し、そこから支配階級としての教訓を引き出した本格的研究論文でございまして、これ又余談でございまして、吉河光貞というのは学生時代は東大の新人会の人間でございます。その後ぐつと変つちやつたという人でございまして、戦後のあの砂川基地反対闘争の砂川事件の時には、検察側の大將でございまして、終りは公安調査庁の長官になって引退したというその点では終始一貫した男でございまして。でまあ、戦前その他色々ございまして争点は今申しあげた三つにあると、片山潜、細川嘉六、吉河光貞こういうところだろうと思っております。

五、戦後・法政大学などでの研究開始

戦後の研究でございましてがまず敗戦後の時期、先程井本さんから本のご紹介がありました。が、戦後の米よこせ運動の中で大正七年の米騒動がふりかえられるといった時期があり、この時にかなり米騒動論文がでて参りますが、その後細川史料がまだ整理される以前の学会でぼちぼち細川史料の整理を手伝うという、一つは東

京の大学生を中心にしたいくつかの米騒動の研究グループがでて参ります。早稲田大学、教育大学、中央大学など、そういう中で法政大学では、まあ社会学部の仕事として最初は始まり、歴史学研究会の仕事になっていきましたけれども、このグループが全国的な視点にたつて始めるといふことになりました。実は私もその中の一人でございます。自分のことを言うようで一才申し訳ないんですが、私共の研究の姿勢の問題、或はこれまで何をやって来たかということをし申し上げたいと思います。で、私共の研究のボスは長谷川博という法政大学の教授、現在八歳で名誉教授でございますが、ついで増島宏さんが社会学科の助手として入られて、この二人を中心にして米騒動の研究を始めたという、こういうスタートでございます。当然の事ですが、近、現代史の研究をやる場合に、いわゆる文字になった史料だけでは必ずしも真実を究められないということが明らかなる事は充分ご承知のことと思えます。特に戦前のことについては、文字になったものはほとんど権力側の手になるということでございます。きちんとした現地調査、特に聞きとり調査というものを重視しなければならぬということ、最初に手をつけさせていただいたのが富山県でございます。

これは法政大学の社会学部の雑誌で『社会学部研究』という雑誌がございますが、これの創刊号（一九五三年）と第二号（一九五四年）に「米騒動の第一段階」という論文で報告されて

おります。この第一段階といっている意味は第二段階、第三段階があったということが当然想定されるわけです。私共の法政大学の米騒動研究は、我々が怠けていた或はいろんな事情があったために全体としては完成をしておりますんですが、これはまだ今でも米騒動の全体をとらえる方法論としては、有効かと思っております。初発段階つまりその第一段階の象徴は一番煎じつめていいますと積み出し阻止という闘い、津留めですね、そこに象徴される闘い、その担い手というのは都市の前期プロレタリアトといったらよろしいと思いますが、そういう階級を主たる米騒動の担い手とした闘いが進んだということになるわけです。第二段階というのは、大都市の米騒動でございます。大都市の近代プロレタリアト或は都市の前期プロレタリアトなどを中心にした米騒動であつて、第三段階というのは生産点における闘いということで、工場労働者のストライキ、或は一番激しい形態としましては成鉱における軍隊との戦闘といったものがある。第四段階としては実は農村とかその他いろいろ、いわゆる騒動という行動様式をとらない状態があるわけでありませう。

六、「不穏」ということ

丁度井本先生のご報告にあるかもしれませんが、実は日本列島に限らず全般的危機の爆発、東アジア或は地球全体を覆うような全般的危機の爆発でありますので、騒動という形で起こら

なかった所でもただ騒動という行動形態が無かっただけでございまして、どこへ行つたつて必ず米騒動の危機があった。あの時、ですから色々皆さん方のご研究などを拝見しましたも、また「米騒動の第一段階」のなかにも引用されてあります。滑川の主婦がですね、米騒動が他所で起こつた、それはそれなりの理由があるんだという発言をされておられますけれども、それは実にすぐれた指摘であると思っております。確かに日本全体に起こるには起こるだけの理由があつた。米騒動の危機というものは全国を覆つていたという風に思います。私が大学生になつた時には、第一段階から第三段階までの法政大学の現地調査が終つておりまして、私が一年生に入つた時には第四段階、農村における米騒動或は全国的な不穏の状況、当時の新聞或は権力の用語でいいますと「不穏」という文字があります。この不穏の状況を主たるテーマとしていた時に私は法政大学生になりました。それ以後の、それから現在に至るまでの私の拙い研究の中でまさにその事が立証されているわけでございます。米騒動が起こらなかつたところでも、必ず米騒動の危機、一触即発の危機が必ずあつた。秋田県においても或は沖繩においても米騒動が起こらなかつた、と京都の人達の研究では言われておりますけれど、そこには必ず一触即発の危機がありました。現在私は埼玉県に住んでおりまして、埼玉県の米騒動については拙い論文を二つ書いておりますが、埼玉県とい

うのは米騒動はほとんど起こらなかったと言うのはそれはとんでもない事で、一寸した加減です。ね。かなりの所で暴動が起こったということが明らかになっております。その他北関東では米騒動はほとんど無かったと言われておりますが、そんな事はありません。それは当然の事でございまして、全国的に国家権力が支配のアミをめぐるしており、一貫した資本主義国家であり、どこかにだけにしかその危機がなかったというのとはとんでもないことであるわけです。

七、神戸・岡山など各地騒動の研究

そういうことで、研究報告としては私共の研究グループでは「米騒動の第一段階」について第二段階として「神戸における米騒動」、これは学生、私共の先輩がまとめたものですが「新史流」という創刊号だけの雑誌でございましたけれども、これに発表いたしました。第三段階は福岡県を中心にした炭鉱、第三段階の一番のピークでございしますが、炭鉱を対象として北九州の米騒動を調査いたしました。これはきちんとしていた報告は出ておりませんが、聞きとり集が現在残っているだけでございまして、そして第四段階といたしましては増島宏氏がやりました「岡山県の米騒動」という報告がありまして、これは私が一年生の時ですが、岡山と新潟へ現地調査に行きました。その後法政の歴史学研究会としましては、広島、長野、静岡、山梨、香川、秋田などに現地調査に行っておりますが、

いずれも大変残念なことでございますけれども、きちんとしたまとまった報告——学会に提出できるような姿には、まだなっております。いずれにしてもそういう研究が戦後一つある。

その他にも色々、教育大とか早稲田大とか中央大その他かなり一時期です。ね、一九五〇年代ですが米騒動の各地方史的な研究がかなり盛んに行われた。一方さき程来申し上げております細川史料を全体として集約して米騒動の全体像を明らかにするという意図のもとに、京都大学の人文科学の研究所が米騒動研究に着手しております。

八、細川史料その後の行方

実はこの細川史料は、戦後どうなったかと言うと、三組あって一組がモスクワへ行った。二組は日本に残っております。一組は大原社会問題研究所が買い上げ、もう一組は細川先生が研究所を退職される時、退職金がわりに貰われた。細川史料と言いましても一寸、史料の行方みたいなことなんです。モスクワにある細川史料ですね、片山潜が使った、これが今どうなっているかってこと。あなたも報告されないので、ボクも知らないんですけど、ずい分その後ソ連へ行っている日本人は沢山いますし、歴史学者も沢山ソ連へいつているんだけれど、片山潜が使ったこの細川史料がモスクワでどうなっているのか、どんなものが行っているのかというところがちょっとも分らないですね。この点は

日本の歴史学者が沢山行っているにも不拘、やや怠慢ではないかと、或は行っておられる方々の米騒動についての認識が浅いのではないかと、そのために史料の所在についてあなたもご報告がないという事態が続いているんじゃないかと思っておりますが、大変残念なことです。ただ想定されますのは、モスクワに行った細川史料よりも、日本にある細川史料の方が史料的には充実していると思われるんです。といえますのはこの史料がモスクワにいつてからも、片山潜が亡くなって以後もですね、大原社研は米騒動の史料の蒐集をやっているわけでございますから、その後にはやられたものというのには恐らく、モスクワに行っていないのですから、いま日本にある細川史料の方がより充実していると思います。なおモスクワに行っているのは布施連治さんの談話としては新聞の切り抜きを送ったと、こうなっておりますが、日本には切り抜きは残っておりません。手で転写したものの新聞の記事が残っております。当時、つまりもう米騒動が起こってから七・八年たっている時点で、一体そんな膨大な新聞の切り抜きがつかれたのかこれは分らないんですが、布施連治さんのお話だとそうなっているんで、その点も一寸確かめてみる必要があると思っております。

さて、そうした膨大な細川史料を整理するには人手とお金が必要でございまして、当時の大原社研、或は法政大学の社会学部はお金も人手もとても無かった。それで、山辺健太郎さんなんかの仲介もあつたりしたそうでございます。